

## ペット(愛玩)からコンパニオン (伴侶)へ:人間と動物の新たな関係

立正大学社会福祉学部  
溝口 元

## 本日の話題

- はじめに:自己紹介
- 急速な犬の人間化
- 動物介在療法の背景
- 生命倫理における犬
- ペットロス・動物供養
- 日本人と動物
- まとめ:動物-人間系の模索



## 自己紹介

- 溝口 元(みぞぐち・はじめ)
- 1953年、長崎県生まれ
- 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了(理学博士)、生命倫理、テクノエイド論
- 1983年、立正大学短期大学部専任講師
- 1996年、立正大学社会福祉学部教授
- 2000年、同大学院社会福祉学研究科教授
- 放送大学客員教授、東京大学非常勤講師
- 社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士

## 「犬」の語が入った諺

- 負け犬の遠吠え
- 飼い犬に手を咬まれる
- 犬になるなら大家の犬になれ
- 犬は3日飼えば3年恩を忘れず
- 犬馬の(心、労、齢、養い)
- 犬骨折って鷹の餌食
- 犬兎の争い
- 犬猿の仲

## 犬と人間

- 狩猟犬、番犬としての家畜化からペット化へか
- ペットから狩猟犬、番犬として家畜化へか★

## 現代の犬たち

- 働く犬たち(Working Dog, Service Dog)  
探索犬、警察犬、検疫犬、麻薬犬、軍用犬、等
- 「身体障害者補助犬法」(2002年5月)  
盲導犬(1067頭)、聴導犬(19頭)、介助犬(50頭)

## 急速な犬の人間化

- 犬の整容:カット、シャンプー、リンスウェア、整形、装飾品、サプリメント
- 犬も生活習慣病(がん、糖尿病、高血圧、腎不全、尿道結石、肥満等)
- 犬の平均寿命の延長から老化による機能低下、認知症、看取り、等

### 心が癒されるメカニズムの仮説

- 37℃という体温のぬくもり、接触感の良さ。
- 都市生活者の自然との触れ合い欠如の代償。
- 少子化による子どもという愛する対象の代替。  
イルカの場合
- 動物が発した音波が、人間が胎内で聞いていた音と同じ周波数。
- 母親の脈拍、鼓動、声、心音などを自閉症、失読症、多動症児に利用⇒劇的に改善

### 犬の役割 (Suzan Cohen, 2005)

- コンパニオン(伴侶)
- プロテクター(守護者)
- ブリッジ(人間関係の橋渡し)
- ファミリーメンバー(家族の一員)
- シグニフィカント・アザー(重要な他者)

### 西洋医学のスタンス

- 西洋医学では、局所病理論
  - 東洋医学(中医、漢方)では、全身性医学
- ★近代科学思想として
- 人間機械論……臓器移植の背景
  - 要素還元主義……遺伝子治療の思想
- ★今日の医療現場では
- なにはともあれ延命治療の推進(高医療高負担)
  - 死は医療従事者にとっては敗北(治療>QOL)

### 心理療法・精神免疫療法

- 音楽療法、芳香療法、色彩療法、動物療法  
園芸療法、絵画(芸術)療法、箱庭療法など
  - ・無表情だった当事者・患者が明るさを回復した。
  - ・会話がなかった者同士が会話を交わした。
  - ・目的意識や活気が生まれるようになった。
- \*精神免疫療法
- ・宗教的信仰と自死(殺)、発癌、心臓疾患の予防、祈りと自然治癒との関係を科学的に解明する

### 生命倫理のスタンス

- 宗教・哲学的側面
  - 医学・生命科学的側面
  - 法学・社会科学的側面
  - 歴史・文化的側面
- 生命・先端医療技術のあるべき姿を議論する  
⇒生命に関する議論は、広義の生命倫理に包含
- ★動物が関わる事例:動物実験、盲導犬、ペットロス  
安楽死(殺処分)、動物保護

### ペットロスの事例①

- 男性:25歳、イヌの場合
- 亡くなった場所  
⇒家で、眠るように亡くなった。
- 家族内での役割  
⇒かわいい弟みたいなもの。
- 葬儀は行ったか  
⇒ペット葬儀で、ちゃんとしたのをやった。

- 亡くなったことを知った瞬間、どう感じたか  
⇒亡骸を見ても、死んでるんじゃないかと寝ていだけじゃないかと思った。添寝をして10分位何もしないで過ごしたら、なんだか納得した。
- 死に対して、何か得るものや学んだものは  
⇒添寝して体の冷たさを感じた。ああ死んじゃうってこういうことなんだな。でも、反対に生きていって暖かいことなんだって。
- 現在、他のペットと生活していますか  
⇒一度ペットを飼ってしまうと無しでは生きていけないですよ。

## ペットロスの事例②

- 男性:28歳、ネコの場合
- 家族内での役割  
⇒心の不安定だった私にとってはまさにコンパニオンアニマルだったんだ。大切な存在です。
- 亡くなったことを知った瞬間、どう感じたか  
⇒できることならば想像もしたくない。ショック。
- 死に対して、何か得るものや学んだことは  
⇒いのちの大切さ、代わりの利かないかけがいのなさ。

## ペットの死後の追悼

- ペットの墓:個別墓、合同墓、納骨堂
- 墓碑銘:ありがとう、安らかに、感謝
- 霊園:火葬、位牌、骨壺、埋葬、49日法要
- 動物園では定期的に慰霊祭を実施  
⇒立ち直りの手段として
- 植樹:ペットの遺骨の上や近くに植樹
- 絵馬、追悼文:ペットについての書き残し
- 当事者会:同じ体験をした人たちの集まり

## イヌの安楽死(殺処分)

- 耐え切れない機能が障害された体の怪我
  - 苦痛、不快感が抑えられず回復不能な疾病
  - 生活に影響を及ぼす老衰による「もうろく」
  - ヒトに危害を及ぼす癡猛さ
  - ヒトへの疾病感染
- ヒトの反応として
- 罪悪感、喪失感、意気消沈、食欲減退、悲嘆

## 生類憐みの令(1685-1709)

- ▼従来の解釈
- 徳川綱吉という専制君主が個人の嗜好で発令した。その証拠に、死後直ちに廃棄された。
- ドイツ人医師で綱吉に謁見した ケンペルの「日本誌」(1727)では、日本の異常な動物愛護の法令。
- ▼今日の解釈
- もともと捨て馬、野良犬の餌食になる捨て子対策だった。犬殺傷に対する処分は、それ以前からあった。
- 実際、捨て子が減少。鷹狩抑制から銃規制が徹底。病人の介抱が進展、等が指摘されている。

## 日本と欧米の苦死観の違い

- 日本:殺すことに抵抗が強くあり、殺さないことを奨励(生こそ至上、苦は生の範囲)
- 欧米:苦痛を与えることは罪であり、死より苦痛を与えないことを奨励(死で天国へ)
- われわれ(ヨーロッパ人)の間では人を殺すことは恐ろしいことであるが、牛や雌鶏、犬を殺すことは恐ろしいことではない。日本人は動物を殺すのを見ると仰天するが、人殺しは普通のことである。(16世紀末のポルトガル宣教師、フロイスの著作『ヨーロッパ文化と日本文化』)

## 南極に置き去りにした犬の場合

- 1958年、日本の第2次南極越冬隊  
氷に閉じ込められ、樺太犬を放ち帰国  
翌年、観測隊が昭和基地でジロー、タロー  
の2匹が生存を確認、英雄的動物に
- 映画化「南極物語」(1983)、リメイク2006年
- ★日本:生き残ったことは快挙である
- ★欧米:置き去りよりも安楽死させるべきだった

## 日本人の動物供養

- 動物供養:殺した(食べた)動物の霊を弔う  
⇒供養塔を建てる場合と儀礼だけの場合
- 食べなくても供養した動物(江戸期から)  
⇒馬、犬、猿、鯨、海亀など
- 犬の供養:安産祈願と関係させる所も
- ペット供養の根底に動物への感謝の気持ち

## 仏教思想の動物観

- 仏教の動物観:生命平等主義、不殺生戒
  - 畜生(界):人間と動物を分離する思想  
⇒動物蔑視の階層的価値観の中の生命平等主義
  - 仏教的説話の擬人的動物観の再活用  
⇒地域に根差した動物を含む自然と人間の関係の再考
- (亀山純生(1999)日本の仏教思想における動物観:動物観研究)

## 犬と人の連続性

- ダーウィン「種の起源」(1859)以降の関心  
人間の心はどのように成立したか?
- 「人間の由来」(1871)、「人及び動物の表情について」(1872)で、次第に心理面でも連続性を考える。
- 人畜共通感染症:狂犬病、ブルセラ病、イヌ・ネコ回虫症、パストレルラ症など

## ガンジーの言葉

人間と感覚を持つ他の生き物とを分け隔てる点はほとんどない。我々生あるものはみな喜びを感じ、みな元気で自由に生きることを心から望む。そして皆ともにこの地球の上で生きていくのだ。

## まとめ:新たな動物 - 人間系の模索

- ペットへの愛情は、人間の場合と同等以上、そこから、人間同士の絆の回復・構築としてのペット  
→とはいえ、ペットと人間は対等ではない。主従関係がはっきりしている。単なる「同居」であって「家族」ではない。
- 新たな思想の構築が求められている。  
→たとえば、動物と人間が一体化したシステムの模索。ペット(愛玩)からコンパニオン(伴侶)へ。